

7. 「東亜同文書院の交通大学キャンパスの占用に関する考察」

盛 懿

葉 次は上海交通大学の盛懿助教授からの発表です。盛先生の発表は、私の午前中の内容とも関係があります。隣同士でもあったけれど、占領されたときもあるということで、占領時代についての発表となります。

盛 皆様、こんにちは。今日の私の報告ですが、東亜同文書院が交通大学のキャンパスを占用したときのことをお話しします。東亜同文書院というのは、日本が中国でつくった特別な学校です。1938年4月から45年9月まで、交通大学の校舎を7年間使いました。この歴史は交通大学の教職員、学生ともに注目しておりますし、これは同文書院の歴史のうえでも特殊な時代です。今日は三つの部分に分けて、同文書院が交通大学のキャンパスに進駐し、撤退をしたプロセスについてご報告します。

まず第1に、交通大学の教職員と学生が移転を余儀なくされた時代です。1937年8月、日本軍は上海事変を起こし、上海は戦火に見舞われました。交通大学の上空にはよく日本軍の飛行機が旋回しました。39年9月18日、10月4日など、キャンパスの上空にたびたび日本軍の飛行機が旋回し、通常の授業はできない状態になりました。

爆撃の危機を避けるため、交通大学は徐家匯の校舎から撤退を余儀なくされました。9月13日、黎照寰校長が教育部に「上空で敵機が低空旋回をしている。学生は安心して講義を聴くことは難しい。学校の安全のために場所を移して授業を行いたい」という書簡を出しています。学校としては正面にあった宿舎に移りましたが、ここは戦闘区と近く、10月11日にはフランス租界の中華学芸社と震旦大学の一部の建物を借りて運用しました。11月5日、4学年ともここに移り授業をしました。本来でしたら9月に始業するのですが、2

カ月遅れての始業となりました。この移転で、黎照寰校長は、教職員や学生に文献や帳簿、図書、設備などを運ばせようとしてしました。動かさないものはキャンパスに残さざるをえない状況でした。

しかし、戦争であったので学生数は大幅に減りました。1936年の時点では、在校生は710人いましたが、1学期が終わったとき、在校生は565人しか残っていませんでした。多くの学生は故郷も戦争で失い音信不通となり、交通も遮断され、学校に来ることもまなりません。多くの学生は休学したり、他校で履修することになったり、学業を中断せざるをえない状況になりました。

交通大学はフランス租界で苦難の運営を続け、1940年8月には、関係者の協力の下、重慶に交通大学分校をつくりました。上海フランス租界、そして重慶九竜坡という2カ所で、苦勞しながら学校を運営しました。そして関係者の協力、支援の下、いろいろな困難を乗り越え、学校は生き残り、維持、発展を遂げてまいりました。

これは、交通大学が上海の租界で借りた震旦大学の校舎です。これは、当時、交通大学が重慶の九竜坡で運用したときの校舎です。交通大学が元のキャンパスから引っ越しすると、徐家匯校舎は難民救済所が借用することになりました。37年9月、国際救済会が交通大学に借りたいと言い、難民を収容しました。10月28日に難民救済会上海分会主席の潘公展が鉄道部、教育部に交通大学のキャンパスを借りたいと電報を出しました。そして、10月末には交通大学の同意を得て、上海市難民収容所の難民がこの学校のキャンパスに入りました。11月中には国際救済会がこれを引き継ぎ、第5難民収容所としました。フランスの警察が警備にあたり、校内には難民1万5000人が収容されるなど、上海としては最大の収容所となりまし

た。

第2は、東亜同文書院による交通大学キャンパスの占有です。校舎は難民収容所として2カ月間使われました。37年12月30日、日本の憲兵隊が交通大学の徐家匯校舎を占拠し、キャンパス内に憲兵隊徐家匯分駐所というものをつくりました。そして、校門に近い旧図書館の近くに駐留しました。交通大学の校舎、そして運び出されていなかった設備、家具といったものが日本軍の手に落ちることになりました。同文書院のもともとの場所は虹橋路の100号にありました。交通大学とは隣同士でした。

1937年の盧溝橋事変以降、同文書院は日本の長崎に戻りました。虹橋路100号にあった元の校舎は焼けました。日本の同文書院としては上海に戻りたいということで、日本政府の支援を積極的に求めているところでした。当時、上海に残っていた書院の職員は、書院の新しい場所を探す命を受けていました。そして、当時日本軍の占領地区のほとんどの建物は、日本軍の戦火による破壊を受けたりして使えないという状況があり、わずかに残った建物なども日本軍の宿舎や野戦病院になっていました。

37年11月26日、東亜同文書院の16期生だった幹事の久保田正三を上海に送りました。久保田は実情を調べ、直ちに日本駐上海総領事の岡本、陸軍駐上海武官の原田少将と会いまして、「交通大学は東亜同文書院の東側の隣で規模は大きい。書院の臨時校舎とすることができるのではないか。教職員住宅こそ足りないけれど、滬江大学や中山医院、国立上海医学院よりはいいのではないか」と提案しました。その結果、陸軍の武官は「軍隊として同文書院の今回の災難には大いに同情する。できる限り便宜を図りたい」と返事をしました。また、「今後、ここを占領するのであれば、書院には臨時校舎を提供することができるのではないか」と言いました。

12月、久保田正三は東亜同文書院の理事長で

ある岡部長景にこれを報告し、「各方面に同調を得ているいま、英断をしてほしい」と求めました。12月7日には外務省の意見を聞きたいということを行いました。12月14日、外務省は上海の岡本総領事に電報を送り、領事館と軍、その他の方面と調整し、できる限り同文会の要求を満たすようにということを求めました。同文会の理事会も会議をし、分校をどうするかという問題を話し合い、上海へ戻ることを決めました。そして、38年4月にあらためて上海に戻り、交通大学の校舎を同文書院の校舎とすることになりました。

交通大学は、中国の鉄道部の建物であるけれども、その当時はフランスによって管理され、難民救済所となっている。交通大学は完全に国立大学であるため、外国とは関係ない、また、その位置はもともと同文書院と隣同士であり、この校舎を同文書院の校舎として使うのは適切な処置であるという内容の、外務省から文化事業部へ宛てた文書があります。

38年1月3日、大内院長が上海にまいりまして、十数日滞在し、復興の準備をしました。1月6日、財団法人東亜同文会会長の公爵・近衛文麿が外務大臣・広田弘毅に臨時補助費申請書を提出し、上海の復興に向けて18万4050元の補助を必要とすると言いました。3月15日、東亜同文会会長の近衛文麿は、外務省と陸軍に正式に報告書を提出しました。内容は「今回、この上海市の徐家匯にある国立交通大学を書院の臨時校舎として使用したいので、許可を願う」というものでした。同文書院の日本での地位に鑑み、外務省は直ちにこれを批准しました。38年3月19日には、この文書を陸軍部の梅津陸軍次官に回しました。陸軍部は同じように協力し、3月25日には外務省に「異議なし」という返答をしました。3月28日、外務省文化事業部は近衛文麿に「上海交通大学を東亜同文書院の臨時校舎として使うことについて、3月25日の文書を外務・陸軍の両部門に送りました。そして、上海徐家匯の国立交通大学を東

東亜同文書院の校舎として使用することに異議はない」という文書を送りました。つまり、外務省と陸軍部の同意を正式に得たわけです。

また、3月28日までに難民をすべて上海交通大学のキャンパスから撤退させることを命令しました。3月中旬になっても、交通大学の校内には7～8人の難民がいました。同文会は3000円を出して、救世軍にこれらの難民を早期に撤退させることを申し出ました。そして、3月末までに国際救済会はやむなく難民を交通大学のキャンパスから離れさせました。

38年4月8日、同文書院は交通大学のキャンパスに引っ越してきました。4月17日、交通大学の校門からは「交通大学」という額がはずされ、「同文書院」という木の看板が掲げられました。その日は日本海軍少将、陸軍少将、上海駐在領事など100人余りが開院式に出席しました。こうして交通大学のキャンパスは日本の憲兵、同文書院に7年余り占拠されることになりました。

同文書院は、1939年に東亜同文書院大学に昇格しました。35期から46期にかけて、交通大学のキャンパスで勉強した書院の学生はおよそ1492人です。同文書院が交通大学に入り、交通大学の建物内部を任意に取り壊したり、改造したりしました。また、いろいろな器物が運び出されたり、壊されたりしたものもあります。校内にあった、交通大学の創始者である盛宣懐の銅像も壊されました。そして、校舎、宿舎、電気実験室の設備なども取り除かれるものがありました。また、書院は自分たちの必要に応じて工程館を教室や教授の研究室にしましたし、図書館は一部憲兵が駐留する以外に同文書院の図書館として使われました。上院を教室とし、一部を職員の住宅としても使いました。中院は職員の住宅として使われました。体育館、医務室、学生食堂、学生宿舎なども同じ用途で使われました。

また、同文書院はキャンパスに建物を新たに作りました。校舎は合わせて11棟、総面積は

1321㎡となりました。うち、学生の寄宿舎が1棟つくられました。職員の住宅は6棟、役員の住宅は4棟です。これらの建築は比較的簡単な2階建てのもので、同文書院の当時の地図にもこれらの建物の表示があります。

資料でもわかりますが、上海事変以降、日本軍の空襲の危険が高まりました。交通大学の教職員、生徒たちは租界し、交通大学は国際難民救済会によって難民救済所となったわけです。その後、日本憲兵が交通大学に入り、同文書院は憲兵が占領していることを前提としつつ、東亜同文会と陸軍、外務省の批准を受け、1万5000人余りの難民をキャンパスから追い出すかたちで交通大学の校舎を東亜同文書院の拠点としたわけです。

1937～45年、交通大学は戦争のため、長い歴史を誇ったキャンパスを離れ、上海のフランス租界、重慶の九竜坡で苦難の運営を始めたのです。そのとき交通大学の学生たちは、自分たちが学んでいた校門の前を通ると、美しいキャンパスの様子がまったく変わり、悲しみに暮れました。

3番目は、交通大学キャンパスの回収です。交通大学は租界で運営しましたが、場所は狭く、実験などは租界のいろいろなところに分散して行われました。寄宿はできなくなり、通学生のみで、地方の学生たち70～80人が中華学芸社の講堂で寝泊まりしました。1人当たりベッド1台と机ぐらの空間しかありません。学生たちは、常に自分たちのキャンパスを懐かしみました。黎照寰校長は、国民政府の教育部にもととの交通大学の校舎の状況を電報で知らせたりしました。

1942年8月、汪精衛傀儡政権が、上海陥落区にあった交通大学を引き継ぎ、学校側は傀儡政権の教育部にたびたび報告を出し、日本側に徐家匯の校舎の返還を要求してきました。43年11月5日、張廷金校長が、あらためて傀儡政権の教育部に手紙を出し、校舎の返還を求めました。12月31日、傀儡政権の教育部は交通大学に回答し、「日本の駐中国大使から手紙が来て、同文書院大学は新校

舎建設の計画がある。これが終わるまで、引き続き交通大学の校舎を使いたいということである」ということでした。しかし、同文書院の建築新計画は遅々として進まず、交通大学のキャンパスは常に占拠されたままでした。

1945年初めごろになりますと、日本の敗戦の色が濃くなり、いろいろな戦役に敗れた日本軍が交通大学のキャンパスに入ってきました。一時は5000人以上に上りました。1999年になって、上海交通大学が修繕をしようとしたとき、ある宿舎の寝室に使っていた壁の隙間からゴミを丸めたようなものが出てきました。これは30年代のころの写真ですが、当時丸められたと思われるいろいろな雑貨、中には軍事郵便と書かれたものが5通、請求書2通、組替書1通、「旭光」と書かれたタバコの殻が7～8本分ありました。そして、さびかけた銃の部品や薬きょうも見つかりました。

1945年8月15日、日本は戦争に負け、無条件降伏しました。8月21日、張廷金校長は、あらためて同文書院に校舎の返還を早急に行うように求めました。1週間後の27日、東亜同文書院校長の本間喜一氏は張校長に「貴国政府からの校舎接收の申請について」、「貴国政府から日本大使館事務所への交渉について」、「日本大使館事務所から本学校を引き渡す命令について」ということで回答しました。

戦争が終わって1カ月後の9月15日、中国軍隊が交通大学にあらためて入り、中国教育部警護特派員弁公所の責任者が東亜同文書院を接收しました。そして、本間喜一氏らが、日立東亜同文書院大学引継書に署名しました。これが表紙です。9月から、同文書院のすべての学生、教職員、その家族の大部分が交通大学のキャンパスから離

れ、北四川路の青年会館に移っていきました。そして、交通大学の教職員、学生は交通大学に戻るようになったのです。アメリカの提供した軍用船で、同文書院の学生や職員らは次々と日本に帰りました。こうして、東亜同文書院は上海での46年の歴史に幕を下ろしたのです。

日本の憲兵、同文書院は、交通大学の校舎を7年余り占拠し、交通大学には埋めがたい損失を残しました。戦争は中国人民に災難を残し、日本の人民にも不幸を残しました。すでに70年が過ぎました。私たちはこういった歴史を鏡にし、未来に目を向けるという精神で、戦争を避け、平和を大切にし、中日民間の友好、学術交流を行い、中日関係の絶え間ない進展を図るべきだと思っています。ありがとうございました。(拍手)

葉 何かご質問があるようでしたら。時間があまりありませんのでお一人程度ですが、何かありますでしょうか。

百瀬 長野県の百瀬というものです。この中に久保田先生の名前が載っていますが、僕の出た高校、大学の学長でした。松本市にある、野球が強い松商学園高等学校の校長もやっていたし、僕の父の仲人もやったりしていたものですから、久保田先生の細かいことがわかりましたら、もうちょっと話をしてもらえればありがたいと思います。

葉 いまいただいたご質問ですが、久保田先生について専門の研究をしているわけではありませんので、先ほど発表された毛先生と個別にお話をさせていただくのがよろしいかと思えます。すみませんが、そのようにしていただけますか。ありがとうございます。